

アジア酪農交流会通信

Asia Dairying Exchange Association News

第41号

2017.
6.30

Asia Exchange Association Dairy
アジア酪農交流会

関連リンク サイトマップ お問い合わせ



Home ホーム Greetings 会長あいさつ Business 主な事業 List of officers 役員一覧 Terms 規約

HP : <http://asia.rakuno.org>

農民道五則

アジア酪農交流会 会長 野 英二

アジア酪農交流会ならびに関係者の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。また、事業推進に対し、日頃からのご支援とご協力を頂き心からお礼申し上げます。

通信40号で述べたように私は今年3月末、酪農学園大学の定年を迎えることを機に、会長を辞する心づもりでいました。しかし、交流会の顧問や理事の方々からの押しに屈し会長を継続することといたしました。41年前に酪農学園大学附属農場専任教員として採用になり、教育面では1年次の農場実習と2年次の農家（委託）実習を担当していました。いずれの実習も必修であり、農場関係教員（大学2名、短大2名）だけでの実習は到底無理でした。当然ながら、農場の技師の方々と一致協力しながら農場運営とそこでの実習教育を行いました。農場スタッフ全員の心意気は「農民道五則」の精神であったと思います。農民道五則とは、「農民は誠そのものたれ、天地の経緯に従え、土地を愛せよ、勤労を尊び儉約を守れ、一致協力せよ」であり、酪農学園の前身である北海道酪農義塾の教育精神であります。改めて酪農学園における私の足跡を振り返るとこの農民道五則が頭に浮かんでくるのです。これからもこれを忘れずに歩んでいきたいものです。よろしくお願ひします。

さて、今年の「アジア酪農交流会の集い」（2017.5.20）において新役員体制の提案が了承されました。名誉会員に尹汝昌（前顧問）氏、新理事にパレホイ（デンマーク）・ダナパティ（ネパール）・福田昭夫・田村健一・梅原健二・早坂悟氏の6名の方に就任頂きました。事務局次長に酪農学園大学EXセンター国際交流課の篠原朱輝子にお願いしました。皆様からの一層のご支援をお願いいたします。

また、第3回原田賞を山田実氏と嘎尔迪氏（中国内蒙）に授与いたしました。2氏はアジア酪農交流会の活動に多大な貢献をし、現在も顧問としてご尽力いただいている方です。ここに改めて感謝申し上げる次第です。

今後ともアジア酪農交流会の活動に対して、一層のご支援とご協力をお願ひいたします。

CONTENTS

農民道五則	野 英二	1
多くの試練を乗り越え、前進する韓国酪農		
～1頭当たり乳量9,400kg超、日本を追い抜く～	安宅 一夫	2
野先生に感謝	細田 治憲	4
アジア学院までの小さな旅 2017年春	井澤 敏郎	5
最新人間栄養医学「酪農」は人類を救う（その4）		
～やどり木とびつく～	篠原 功	6
写真で見る2016年度の主な事業		7
事務局報告		13
2016年度決算報告		13
寄付者ご芳名		13
2016年度事業報告		13
2017年度予算・事業計画（案）		14
役員名		14
規約		14

多くの試練を乗り越え、前進する韓国酪農 1頭当たり乳量9,400kg超、日本を追い抜く

酪農学園大学名誉教授
アジア酪農交流会顧問

安宅一夫

アジア酪農交流会とともに42年

42年前、1975年8月21日から10日間、日韓友好親善協会の主催による学生韓国農村視察団を引率して韓国を訪問した。これが筆者の最初の韓国訪問であり、海外訪問であった。それが縁で、その年10月18日、アジアの酪農青年の育成支援とアジア諸国との酪農交流を目的として設立されたアジア酪農交流会に参画して今日に至っている。

アジア酪農交流会の創立者で初代会長となったのは故原田勇酪農学園大学名誉教授である。創立のきっかけは69年3月、韓国の前首相（当時）金鐘泌氏に韓国の草地改良のため原田助教授が同僚の高杉成道教授、村山三郎助教授と共に韓国に招聘されたこと。草地どころか山に木が一本もないのに驚いて、アジア諸国の酪農振興と酪農青年の育成に貢献する仲間つくりを思い立った。以後この会は、酪農学園大学の有志によって運営され、北海道酪農の大御所である故町村末吉さん、故黒澤勉さん、宇都宮潤さん、細田治憲さんには設立当初から応援協力いただいている。大御所は、いずれも戦後アメリカで酪農研修の経験、その恩をアジアや途上国に酪農振興で返したいという高い志を持っている。

現在、朝鮮半島は危機的状況にあり、日韓関係も冷え切っている中、口蹄疫の発生で、中止になっていたソウル牛乳主催の乳牛共進会が昨年10月、4年ぶりに再会された。それを機会に、久しぶりに垣間見た韓国酪農の現状とその周辺を紹介する。

日本酪農のルーツ、韓国酪農の歴史

日本酪農は、飛鳥時代に百濟（韓国）から渡來した智総の子の善那が孝徳天皇（在位645～654年）に牛乳を献上したことに始まる。仏像などと共に智総が持ってきた医薬書の中に牛乳の薬効や乳牛飼育法の記述があり、これによって酪農の知識が我が国に伝わってとされている。なお、智総など渡来人は既に牛乳飲用の習慣があったとされ、韓国酪農はそれ以前に始まっていることになる。しかし、わが国がそうであったように韓国の酪農・牛乳文化は宮廷や貴族階層にとどまり、庶民には広まらなかった。その後、わが国では明治初期に欧米から乳牛と酪農技術が導入され、戦後の酪農振興政策により急速に発展した。韓国ではやや遅れて1902年にフランス人によってホルスタイン20頭が導入され、08年に政府による乳牛牧場が設置されて近代酪農が起こる。戦後一時衰退、61年朴正熙大統領の第1次経済開発5か年計画により酪農振興政策が盛り込まれ、酪農発展の基礎がつくられた。筆者の最初の韓国訪問はちょうどこの直後であった。

停滯する日本を尻目に生産性向上

日本の酪農は戦後、世界に類を見ない速さで飛躍的に発展してきた。61年前（1956年）のデーリィマン8月号に、北海道の生乳生産量が100万石を突破し、その記念として酪農関係者が札幌大通公園に牧童像を建立して盛大に祝ったことが載っている。その前年、北海道の生乳生産量は21万0,964t、酪農家戸数3万9,200戸、乳牛頭数8万8,950頭、1戸当たり頭数は2.3頭であった。この60年で酪農家は1/6に減ったが、生乳生産量は20倍近くも増加した。また75年に牛群検定が開始されてからの乳牛の生産性の増加には目覚ましく、その後30年間で生乳生産量は500万6,000tから829万6,000tとなり、1.7倍の増加がみられた。この間、経産牛頭数は113万2,000頭から105万5,000頭に減少していることから、生乳生産量の増加は1頭当たりの乳量增加によるものである。つまり、経産牛1頭当たりの乳量は4,464kgから7,893kgへと1.8倍増加した。

しかし、305日検定乳量をみると、2002年に9,000kgを超えたが、その後伸び止まり05年には前年より減少、その後も伸び悩んでいる。

農水省による主要国のホルスタインの305日検定成績の比較では、最も乳量が高いのはイスラエルで、アメリカ、カナダがこれに続いている。わが国は、これらの国としのぎを削り、常に韓国をリードしてきたが、05年以降は逆に追随する立場になった。またデンマークやフィンランドの北欧の台頭も目覚ましく、わが国は検定乳量の国際比較において、これまでのメダル争いから、入賞圏外へと落ち込んでいる。酪農主要国が生産性の向上に積極的であるのに対して、わが国では生産性の向上に消極的だ。

飼養形態は都府県酪農に類似

韓国酪農をわが国酪農と比較してみると、韓国の飼養戸数は5,498戸、飼養頭数は41万頭、生乳生産量217万tでそれぞれわが国の1/3。1戸当たりの経産牛頭数は36頭と少ないが、1頭当たりの乳量は9,477kgでわが国を1,000kg上回る。

ソウル牛乳傘下の代表的な酪農家の経営内容見ると、平均搾乳頭数42頭、1日当たり平均乳量38kg(37~43kg)、1日当たり出荷乳量1,600kgである。平均乳価は1kg当たり107円と高いが、ほとんど購入飼料に依存しており、乳代の約50%が飼料費である。平均的な給与飼料は配合飼料(CP20%, TDN84%)10kg、アルファルファ乾草3kg、チモシー乾草2.5kg、オーツヘイ2kg、クレイングラス乾草1kg、ビートパルプ2kg、綿実2kg、大豆粕0.2kg、その他濃厚飼料、保護油脂、微生物添加物などである。飼料の1kg当たり価格は、配合飼料40~70円、アルファルファ乾草55円、クレイングラス乾草57円、チモシー乾草42円、オーツヘイ50円などである。飼料設計や給与技術はアメリカモデルで、飼料会社やコンサルタントが指導している。これらの精鋭酪農場では、乳量が高いだけでなく、体細胞数も低く、乳質も優れ、乳牛の健康状態も良いようだ。

韓国酪農は、わが国と同様家族経営が主流であるが、わが国よりも規模が小さい。また購入飼料の依存度が高く、わが国の府県酪農に類似している。

生き残り懸け海外市場に目を向ける

既に述べたように韓国酪農は、わが国に追随して順調に発展し、酪農戸数は1980年代まで増加したが、90年代には減少に転じ、97年には通貨危機の影響により激減、2009年まで急速な減少が続き、以後減少が鈍化している。また、乳牛頭数も酪農家数の減少に加え02年のクオータ制の導入や11年の口蹄疫の発生などにより、減少傾向が続いたが、12年からは増産に意欲ある大規模牧場を中心に増加している。

しかし国内の生乳生産は増えたものの、アメリカをはじめとする諸外国とのFTA締結によって牛乳・乳製品の輸入も増加。結果、多量の在庫を抱えることになった。そこで生き残りを懸けた戦略として、中国など海外市場への輸出を模索した。その結果、中国への育児用粉乳の輸出が増加し、中国の有名デパートでは、韓国のプレミアム牛乳が売られている。

わが国で活躍する韓国人酪農家も

私どもアジア酪農交流会は、韓国を中心とするアジ

ア諸国の青年の育成や酪農関係者と交流を続けている。交流会の申し子、高陽憲基さん(69)が、北海道千歳で牧場を経営して10年になる。憲基さんは、韓国で生まれ、育ち、延性大学を卒業した後、来日して黒澤勉牧場で研修するとともに、酪農学園短期大学酪農学校を卒業。その後、日本、アメリカ、カナダ、イスラエルなどの民間・国立の牧場で勤務・研修した。07年に恩師黒澤勉さんの世話を現在地に営農を開始。現在、憲基さん夫婦は息子の鐘律さん夫婦とともに(写真)、32haの土地に100頭の乳牛を飼養している。就農当初から平均乳量1万kgを持続し、ここ数年はトウモロコシサイレージの給与量を増加し、濃厚飼料を減じている。また乳成分も高く、体細胞数と細菌数は低く、高品質牛乳生産農家として各種共励会で常に表彰されている。トウモロコシのツインロウ(千鳥まき)をわが国最初に取り入れるなど、飼料作物の栽培にも研究熱心で、収量は北海道平均の2倍近くもあり、技術は卓越している。わが国の酪農先達のような気概を感じる。韓国酪農は、多くの苦難に遭遇しているが、それを乗り越え進んでいる。韓国酪農の意欲と努力に敬意を表し、本稿がわが国酪農の一層の発展の一助となれば幸いである。

[本文は、デーリィマン 第67巻・第6号(2017年6月号)に掲載]



写真：日本で牧場経営を初めて10年になる高陽牧場の皆さん

野先生に感謝

由仁町酪農家
アジア酪農交流会顧問
細田治憲

野英二教授退職記念会に参加させて頂いた。心からお疲れ様、ご苦労様と労をねぎらいたい気持ちです。定年退職という顔付ではなく、若々しく第二の人生に対する余裕が感じられました。

ある時、野教授にお会いしたいお方をご案内したことがあります。「野教授は何処に居られますか?」と尋ねると、「あの先生ですよ。」「エ~! ? あの人が野教授ですか? 農場の職員かと思いました…」。学生との親近感が強く、教授らしからぬ型破りの教授でした。野先生は酪農学園附属農場敷地の中に生を受け、ご両親の生きる姿を見て育った生粋の実学教育者だと思います。

ご尊父様は機農高等学校の先生として長い間奉職なされました。学生に対する接し方は親子先生共に大変似て居られ親近感を覚えました。学生一人一人に対して全人格を持って関わって居られるお姿…教育の原点ではないでしょうか。誠実で「心」のこもったご立派な教育者で居られること尊敬しております。この姿勢は酪農学園大学の初代学長 樋浦 誠博士教授の教育哲学がありました。時代が変わっても教育の原点は変わることはありません。

酪農学園大学は三愛精神と実学教育を標榜し、農場実習と酪農家委託実習をカリキュラムの中に組み入れています。野先生は40年間一筋にメインスタッフとして実学教育の推進にご尽力、奮闘なされた功績は計り知れません。長年に亘る地道なご活躍が認められ「全国大学農場教育賞」を私立大学から野教授が初受賞されたことはその「証」であり、尊敬の念と共に心からお慶び申し上げます。

また、野先生は酪農学園の外郭ボランティア組織であるアジア酪農交流会会长を長年に亘り務められ、アジア諸国の酪農発展のためにご活躍、ご尽力なされました。更に留学生の交流、支援にも深い心配りをされて居られますことも特筆に値致します。

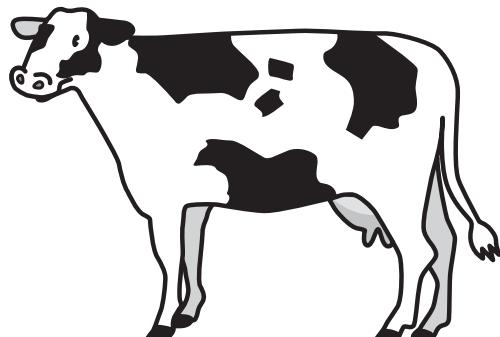
退職は区切りであり、新たな人生の始まりですので

益々ご健康にご留意下さい様に。

これからはアウトサイドの立場(違った視点)で、酪農学園のあるべき姿(方向)に対して利害や立場・慣例等にとらわれず、公平率直にメッセージを発信して頂きたくご期待致しております。

酪農学園3年B組金八先生ならぬ 野先生
縁の下の力持ち! 長い間本当に疲れ様でした。
心から感謝の念を申し添えます。

(平成29年4月吉日)



アジア学院までの小さな旅 2017年春

北海道平取町

井 澤 敏 郎

1. はじめに

この春に私の長男の酪が大卒後10数年勤めた高知県南国市にあるキリスト教の清和学園を退職し、栃木県那須塩原市のアジア学園に転職したことで私は小さな旅することになった。私の家で使っていなかった車を長男宅へ私が届けることになったのである。その車での四月の旅のことを書いてみる。帰路は北海道新幹線であった。

2. 岩手県葛巻町にて

私は現在平取町議会議員をしているが昨年の議員視察研修で初めて葛巻町を訪問した。葛巻町は東北の酪農郷としてつとに有名であったがこれまで訪ねる機会がなかった。昨年訪問した折に案内に立って頂いた葛巻町議会副議長の高宮一明氏は酪農家であり、後継者の娘さんが北海道文理科短大酪農学科の出身であることをお聞きしていたので今回再訪させていただいた。昨年は葛巻町の山ぶどうワインの工場とレストラン、売店しか見ることができなかつたので、今回は酪農・乳業工場、木質加工工場、自然エネルギー利用の風力発電と太陽光パネル発電を見ることができた。

人口六千五百人の町に酪農家が120戸あり、入場工場は第三セクターの葛巻高原牧場と民間の乳業会社2社の合わせて3社がある。高原牧場では年間2,200頭の育成委託を受けているとのこと等、とても豊かな町づくりの一端を見せて頂いた。

3. 岩手県奥州市にて

私は高校卒業後東京の石川播磨重工という会社のジェットエンジン生産の工場に勤めていたが、その時独身寮の同室であった方が奥州市に帰郷してリンゴ園を経営しており「江刺りんご」のブランドで生産しておられる。今回その方の退職以来45年ぶりに再会することができた。毎年贈って頂くりんごはジョナゴールドなどとても美味しい、子供達はこの方のりんごより美味しいりんごを食べたことがないというほどでした。念願の再会をはたし、りんご園を案内して頂いたが薄い

皿状の地形に40ヘクタールのりんごが植えられて居て、7戸の共同で運営されていたが近年分離独立したことのこと。後継者の方は農協に勤めながらやっておられるとのことであった。

4. 福島市にて

私の酪農学園酪農学科の同級生が福島市で酪農経営をしている。2011年福島第一原発の放射能被害を受け、表土の除染を行うまで数年間牧草は収穫しても牛に食べさせることが出来なかつた。被害の翌年に彼の牧場を初めて訪問し、傾斜地での酪農経営の卒業後30数年の実績を見せてもらっていた。この地域では果樹の生産も盛んであったが放射能被害で出荷できず、風評被害もあって高齢の農家ではりんごやももの木を切り倒した株が無残な姿をみせていた。その後は年に2回ほど電話して様子を聞いていたが、放射能被害による地域の困難さは部外者の想像を超えるものであった。後継者もおられるが彼も還暦を迎えて地域での役割は益々増えているようである。

5. 栃木県那須塩原市にて

アジア学院の息子宅に着き昨年12月に生まれた3番目の孫娘に初めて会った。上の長女は4年生、長男は新入学であら。広い公宅なので一安心。

アジア学院はご存じの方が多いと思うが発展途上国の学生に地域自給の農業技術を8カ月で教えている。今年の学生は2名の日本人を含めて21名であった。水田、畑作、野菜、養豚。養鶏、養鯉などを実習し、終了後日本各地の視察を終えて帰国する。

今回酪農学園短大5期生でアジア学院元校長の菊池創先生を学園内の自宅に訪問することが出来た。菊池先生には三愛塾の記念式など北海道で何度もお会いする機会があったが、お訊ねするのは初めてであった。アジア学院の草創のころの御苦労や酪農短大から10年間の野幌の思い出、樋浦誠学長や原田先生のことなど種々懐かしいお話を聞きすることが出来た。

息子のアジア学院への転職を機会に思い出深い方々との再会をお伝えしました。

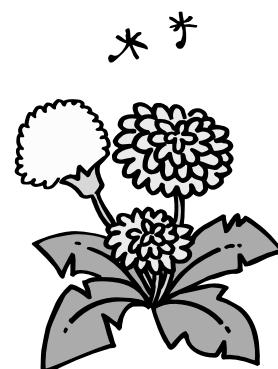


最新人間栄養医学「酪農」は人類を救う（その4） ・・・やどり木とびつく・・・

地球市民学院
篠 原 功

郷里の西讃香川では宿生木を「とびつく」という。幼少の頃、年暮れ造材から大人は子供たちに「とびつく」を持ち帰った。とびつくを噛むとガムのように美味しく楽しかった。後期高齢者75歳になった私は5月はじめ宿生木の緑その元気さにやきもちを妬く。その宿生木は木々に鳥の営巣環境を与え、鳥は木々の虫を捕り一方的な寄生搾取者でないとのこと。かつて私は洗礼講習で新約聖書を読んだ感想を牧師からきかれ「マグダラのマリアはイエスの恋人」と答えたとたんに教会への出入り禁止に。それから47年いまや歴史家の間では「マリアはイエスの妻」が常識に。最近まで親鸞のアミダはインドからの伝承と捉えていた私。ところがネット情報によればアミダの源流はオリエントのイエスの教えであった。その文献には「佐伯好郎. 1935. 景教の研究」が度々登場する。が、A4版2.6kgもの大著。景教とはキリスト教のこと。これが景教をネットの現代語解説で拾い読み。なんと西暦5世紀すでに青森県に景教徒が住んでいた。空海は唐に渡り景教身につけ洗礼クリスチャン名は「遍照金剛」その真言とは新約聖書のイエスの言葉。その文献から法然や親鸞は救い主アミダを見出した。とすれば日本のアミダを本尊とする浄土真宗本願寺派など全ての寺院はキリスト教であることになる。ときに私の脳裏を青森県新郷村のキリストの墓がよぎる。話を戻すが昨年暮れの西讃香川訪問では、住民は老い田は森に。その景観は学生時代、1962. 私は草地開発研究会を主宰、田垣住雄教授を顧問に「牧野忠夫訳. 1956. ニュージーランド草地改良図説（高陽書院）」を学んだ。郷里の情景は今、その第16章「草地に関する農村と都会との関連性について」と重なる。高齢者とは何か自問自答その結論は「高齢者は社会の宝であり、若者の未来拓く体験情報のパイオニア」との考えに。さて私にできる社会貢献とは、幼い頃に大病した私は肺気腫COPD喘息その肺活量は1400ccそれでもゆっくり歩けばサルタノール吸入でかつてない程の快適生活に。小・中のクラス

会が4月上旬に神戸市で開かれクラスメイトは、私の元気さに驚き健康法をきかれツイッター「花霧聖雲@agape_sangha_jp」と食事は最新人間栄養医学スーパー糖質ゼロ花霧聖雲レシピ「水分補給と葉っぱ生野菜と豆腐と枝豆とアボカドと糖質抜き乳肉卵製品と魚とキノコとトマトと海藻と良質な油脂など毎日ケトン食のみ」と伝えた。健康長寿120～150歳めざす。結論は生きてみなければ分からぬが希望は希望を創るもの。世間では老人が増えると社会負担になる、と。あたかも老人は社会悪のように揶揄されているが。元凶なのは老人の働く場を奪っている定年政策だ、と私は思う。AI時代なお生産とは何か。それは価値を生むこと、とすれば老人も価値をたゆまず生産し未来を拓く。私は2型糖尿病なので健康回復への臨床自己試験データをツイッター公開。環境文化論＜文化と文明の吟味＞（専攻）宜しくね。



写真で見る 2016年の主な事業

○アジア酪農交流会の集い（2016.5.20）



新緑が眩しい5月20日（金）10時30分から本学研修館を会場に、2016年のアジア酪農交流会の集いが開催され、30名を超える会員や留学生が出席した。会は發地喜久治副会長の司会で進行。冒頭、物故者や熊本地震被災者等への黙祷を含めて中原准一理事よりお祈りが行われた。



次に開会の挨拶が野英二会長から行われ、交流会の活動概要の紹介や関係者への謝意が述べられた。総会は事務局から配布資料基づき、2015年の事業報告および決算報告が述べられ、監査報告も含めて拍手で承認された。続いて2016年事業計画および予算案が審議され、同様に拍手で承認された。

役員について野会長から提案があり、顧問に安宅一夫氏、中原准一氏、山田実氏、竹花一成氏（大学学長）がそれぞれ就任した。理事には鈴木正氏、鈴木善人氏、佐藤寛晃氏、藤本達也氏、浦川利幸氏が就任した。監事には上野光敏氏、事務局長に小糸健太郎氏、事務局次長に上原恒一郎氏、会計に石塚研太氏がそれぞれ就任した。

続いて11時から鈴木善人氏（㈱リープス代表取締役）から「北海道農業のブランド化と輸出の可能性」と題して1時間ご講演いただいた。スライドを用いての自己紹介やアジア酪農交流会との関わり、地理的表示（G I）保護制度等の説明と実例事例を紹介しながら、ブランド化の重要性について述べた。和食の人気や少子化や食生活の変化からの米消費の減少等を紹介しながら、北海道農業の今後の可能性・方向性を述べた。北海道農業や農産物はこれからブランド力をもった販売戦略を展開し輸出を目指すことが持続的発展に繋がるとまとめた。講演会終了後、旧精農寮をバックにして集合写真撮影が行われた。



その後、留学生を含めての昼食懇談会に入り、和気藹々とした中で、留学生からの自己紹介のあと、出席者全員からのテーブルスピーチで自己紹介や近況報告が行われた。最後は發地副会長の閉会挨拶で昼食懇談会を終了した。

（アジア酪農交流会HPより）

○韓国・崔一信（理事）一行（3名）懇親会（2016.05.28）



○酪農学園大学留学生バスツアー（2016.11.12）



毎年実施の留学生バスツアーが11月12日（土）、留学生20名、関係者12名により開催された。今年は比較的近いところの博物館見学をテーマとし、北海道博物館、札幌ビール園博物館を訪問しました。主催はエクステンションセンター。



北海道開拓記念館から2015年度にリニューアルされた「北海道博物館」は時系列に北海道の貴重な歴史展示物が陳列されており、留学生にとっても「北海道」を知る機会となったと思います。

札幌ビール園博物館に向かうバス車内では安宅一夫名誉教授から「札幌ビール」と北海道酪農との関わりについて講義を受けた。【毎月4日に宇都宮仙太郎翁を中心とした関係者が「ビール粕」の取引のため、ビール園に集まつた。「カレーライス」を食べながらの語らいは通称「4日会」と言われたらしい。】



札幌ビール園博物館では開拓使村橋久成による札幌ビール誕生秘話から現在に至るまでのビールの製法、ラベル、広告等変遷について紹介していただいた。その後、2種のビールのテースティングをさせていただき、ツアーは終了した。

懇親会はアジア酪農交流会の主催で、同ビール園のポプラ館を会場に関係者5名が合流して行なわれた。野英二アジア酪農交流会会长の開会挨拶のあと、永田享酪農学園後援会常務理事の乾杯のご発声で開始された。2時間の和やかな懇談のあと細田治憲同会理事（細田牧場主）の乾杯により閉会となった。このツアーは毎年、酪農学園後援会の後援を頂戴しておりますことに紙面をお借りしてお礼申しあげます。



(アジア酪農交流会HPより)

○野英二教授・西田丈夫先生定年祝賀会・安宅一夫先生古希祝賀会（2017.1.30）



1月30日（月）午後6時半から新さっぽろアークシティホテルにおいて、標記の祝賀会等が約50名の学園関係者および同窓生が出席した。今回は家畜栄養・飼料学研究室OB会およびアジア酪農交流会との共催により行なわれた。

上原恒一郎氏の司会により進められ、ご来賓挨拶が名久井元教授より行われた。次に野教授、西田校長、安宅名誉教授にそれぞれ記念の花束贈呈が本学OBの中田みどり様から行なわれ、3名の先生方からもそれぞれ思い思いに答礼を頂戴しました。



その後、乾杯のご発声を中原准一名誉教授からいただき、祝会に入り、和やかな懇談が繰り広げられた。



テーブルスピーチの前に竹花一成学長からご挨拶と3名の先生方への記念品贈呈が行われた。その後、各テーブルを代表して、河野崇治氏（アジア酪農交流会副会長）、井下英透氏（OB会副会長）、岡本眞一郎氏（酪農学科同期）、小川裕之氏（ゼミ卒業生）、藤本達也氏（アジア酪農交流会理事）、小阪進一氏（本学名誉教授）の方々から心のこもったスピーチが行なわれた。

閉会のご挨拶を細田治憲氏（アジア酪農交流会顧問）からいただき、会を終了した。

最後は輪になって「酪農讃歌」を全員で合唱し、記念撮影のち閉会した。なお、祝賀会後も2階レストランを会場にして2次会が盛大に行なわれました。

（アジア酪農交流会HPより）

○韓国酪農セミナー（2017.02.16）



春めいた暖気通過の16日（木）10時半から酪農学園研修館2Fにおいて、アジア酪農交流会主催の「韓国酪農セミナー」が本学や酪農関連会社等の関係者23名の出席により開催された。

まず、野英ニアジア酪農交流会会长から今回のセミナーの趣旨を含め主催者挨拶が行われた。今回のセミナーは高陽憲基氏のご尽力ご協力によるものとのお話をでした。

続いて、講演1として「最近の韓国酪農を見て」と題して本学名誉教授（前アジア酪農交流会会长）の安宅一夫博士の講演が行なわれた。安宅先生は昨年の韓国共進会訪問や酪農家訪問を交えながら、日本酪農との対比等を含めて、韓国酪農の現状を報告していただいた。



講演2として「韓国における乳牛の飼養技術、特に乳量・乳質向上と健康・繁殖改善のための微生物添加剤の応用」と題し、韓国・Biotopia社専務 黄 教列博士から（高陽憲基氏通訳）「TAM-100」という反芻家畜用添加剤の紹介が詳細に行なわれた。添加剤の主成分（構成成分）やその機能、供給による消化エネルギー増加等の効果、適用事例、評価等を丁寧に紹介していただいた。



開始日月:18-19月曜日 終了日月:22-23月曜日 試験頭数:試験頭数:25頭、対照頭数:4頭、頭数差:21頭 試験期間:2006.9.~2007.1.試験料:高粱+大豆粉(アンソウ)飼料			
項目	試験頭	対照頭	値
開始体重	411.5kg	504.7kg	
終了体重	500.2kg	551.9kg	
終了開始	126.4kg	87.2kg	26
日当量体重	890g	795g	91.9%



講演後は質疑応答も行なわれた。出席者で昼食（サンドイッチと牛乳等）をとりながら和やかな情報交流が行なわれた。最後は發地喜久治副会長の閉会のご挨拶で散会しました。

（アジア酪農交流会HPより）

アジア酪農交流会 2016年度決算報告

2016年1月1日～2016年12月31日

2017年1月1日～2017年5月15日

収 入	前 年 繰 越 金	569,460円
寄 付 金	222,000円	
後 援 会	200,000円	
交 流 費	97,000円	
利 息	97円	
雜 費	円	
合 計	1,088,557円	
支 出		
交 流 費	224,090円	
印 刷 費	150,120円	
通 信 費	64,220円	
図 書 寄 贈	73,320円	
原 田 賞	一円	
H P	3,240円	
慶弔 費	一円	
雜 費	1,166円	
そ の 他	一円	
合 計	516,156円	
収支決算		
収 入	1,088,557円	
支 出	516,156円	
収 支 差 額	572,401円	

収 入	前 年 繰 越 金	572,401円
寄 付 金	173,000円	
助 成 金	200,000円	
交 流 費	92,000円	
利 息	1円	
合 計	1,037,402円	
支 出		
交 流 費	140,407円	
通 信 費	10,400円	
原 田 賞	59,420円	
慶 弔 費	10,000円	
雜 費	2072円	
合 計	222,299円	
収支決算		
収 入	1,037,402円	
支 出	222,299円	
収 支 差 額	815,103円	

※現在残高(2017.5.15)	815,103円
【内訳】	
(通 帳)	399,443円
振 迂 み	402,000円
現 金	13,660円

会計監査

2016年の収支決算について、関係帳簿証票等を審査した結果、各会計の取り扱いが適正に処理されていることを認めます。なお、監査は2016年1月1日～2017年5月15日までを実施した。

2017年5月16日

監事 加藤 勲

寄付者ご芳名 (2016.1.1～2017.5.15)

岩館 明美	小川 博恵	小野武二三	小貫 満子	黒澤 淳子	河野 崇治	小山 久一	齋藤 達夫
関 梓	鈴木 善人	武田 哲男	高陽 鐘律	田村 健一	趙 民大	土谷 令次	中原 准一
野 英二	福田 昭夫	藤本 達也	原田 綾子	細田 治憲	町村 農場	三谷 耕一	孫 鏡錫
尹 汝昌	酪農学園後援会						

アジア酪農交流会 2016年度事業報告

アジア酪農交流会の集い（総会、講演会）の開催

2016.05.20

総会

演題：北海道農業のブランド化と輸出の可能性

講師：鈴木 善人（株）リープス

昼食・懇談会（軽食） 12:00～13:30

韓国 崔一信（理事）一行（3名）懇親会 2016.05.28

会報（通信40号）の発行 2016.07.30

留学生バスツアー（北海道博物館、サッポロビール園）

2016.11.12

日韓酪農セミナー

2017.02.16

中国視察団（7名）との昼食会

2017.03.21

河田啓一郎氏葬儀（3/16）

2017.03.17

雑誌の寄贈

インド：三浦照男氏（本会理事）

韓国：尹 汝昌氏（本会顧問）

アジア酪農交流会 2017年度予算(案)

2017年1月1日
～2017年12月31日

収入	支出
前年繰越金 572,401円	交 流 費 400,000円
寄付 200,000円	印 刷 費 200,000円
後援会費 200,000円	通 信 費 50,000円
交流費 150,000円	図 書 費 80,000円
利息 50円	雑 費 50,000円
合 計 1,122,451円	予 備 342,451円
	合 計 1,122,451円

アジア酪農交流会 2017年度事業計画

会報（通信41号）の発行

アジア酪農交流会の集いの開催
総会・懇親会

各種交流会

留学生交流会（バスツアー）

酪農学園大学EXセンターと共に

雑誌の寄贈

インド・韓国

原田賞（2名）

山田 実氏（アジア酪農交流会顧問）

嘎 尔迪氏（アジア酪農交流会顧問）

その他

アジア酪農交流会役員（2017年度）

名誉会員	金 奉柱	崔 炳七	尹 汝昌
顧 問	坂本 与市	宇都宮 潤	後藤 郁子
	細田 治憲	牧野 一穂	仙北富志和
	安宅 一夫	中原 准一	山田 実
	谷山 弘行	竹花 一成	趙 民大
	柳 監永	嘎 尔迪	V.I.グレビッチ
会 長	野 英二		
副 会 長	河野 崇治	井下 英透	發地喜久治
理 事	艾尼瓦尔艾山	崔 一信	孫 鐘錫
	胡 尔查	梁 信喆	アイヌル・エズム
	盧 金鎮	林 翰群	玉 柱

朝 格图	孫 啓忠	三浦 照男
菊地 創	三谷 耕一	高井 久光
小林 紀彦	小山 久一	押谷 一
金子 正美	星野 仏方	浦川 利幸
鈴木 正	鈴木 善人	佐藤 寛晃
藤本 達也	パレホイ	ダナパティ
福田 昭夫	田村 健一	梅原 健二
早坂 悟		
監 事	加藤 勲	上野 光敏
事務局長	小糸健太郎	
事務局次長	上原恒一郎	篠原朱輝子
会 計	石塚 研太	

アジア酪農交流会規約

- 第1条 この会はアジア酪農交流会と称し、本部事務局を北海道江別市文京台緑町・酪農学園大学におき、必要に応じて支部をおく。
- 第2条 この会はアジア諸国の農学並びに農村振興に関心をもつ人々の友好親善を促進し、併せて青年農学徒の育成に協力することを目的とする。
- 第3条 この会は目的達成のために次の事業を行う。
1. アジア諸国の酪農に関する情報交換。
 2. 酪農青年の交換研修に対する物心両面での援助。
 3. 講習会、講演会、視察会等の開催。
 4. その他。
- 第4条 この会の目的に賛同する個人及び法人は何人でも会員になれる。
- なお、会員は金額の多少を問わず、寄附金の義務を負う。
- 第5条 会員の中から互選により、会長、副会長、理事

及び監事をおく。

役員は、理事会により選出され、任期は2年とする。ただし、再任をさまたげない。

また、理事会の審議により名誉会長、名誉会員、顧問をおくことができる。

第6条 本会の事業は、毎年1月1日から12月31日までとし、経費は、寄附金その他をもって充当する。

なお、予算・決算の審議は理事会によって行う。

第7条 本会は、設立者原田勇の業績を顕彰し、原田賞を設ける。表彰者は本会の目的に対する功績者とし、その規定は別途定める。

補 則 この規約の変更は理事会で行う。

1975年10月18日 発足総会において決定。

1976年2月17日 一部改正。

1995年7月31日 一部改正。

2006年6月5日 一部改正。

2013年8月21日 第7条追加。